

ライカと写真行為の革新 — 写真の可能性について

研究年度・期間：平成 19 年度

研究ディレクター：山 縣 熙
(文芸学科 教授)

共同研究者：師岡 清高
(写真学科 教授)

犬伏 雅一
(芸術計画学科 准教授)

森川 潔
(写真学科 准教授)

学外共同研究者：平木 収
(九州産業大学芸術学部
写真学科 教授)

ライカの登場によって、写真行為がどのように変わったのかを問うことが本研究の一つの基本テーマである。まずもっとも妥当なアプローチはライカの機能を徹底的に洗い出して、それ以前のカメラとの差異を明確にすることである。しかし、写真史の常識的な知識をもってすればこれ自体はそれほど厄介な問題ではない。問題は、カメラの近傍空間に視野を限定されることなく、カメラが布置されうる多様な言説空間を考慮してライカという道具を解明することになる。もちろん「多様な」を字義どおりに遂行することは、困難であるから、限定的な視座の設定が不可欠である。今年度は、近代的なカメラの前身である camera obscura から、ライカに至る過程で、この装置を扱う人間の側にどのような事態が生じさせたのかについて研究を行った。

カメラ・オブスクーラが一つの道具である限り、ハイデガーのいう「道具連関」の意味で、カメラは、人間が内的に組み込まれた一つの意味のネットワークに取まる。この意味のネットワークの結び目に位置する行為者たる身体を持つ人間にカメラは何を惹起するのか、特にその意味、これを歴史的に遡及しながら考察した。アル＝ハゼンに起点を持つカメラ・オブスクーラが布置していた言説空間をまず検討した。グローステストによる神学的（・数学的）「光の形而上学」が、宇宙の数学化を遂行することによってプルネレスキのフィレンツェにおける遠近法実験につながるが、この過程で自然魔術性をおそらく残しつつも、そこからの離脱の線として、プロト・幾何光学的なプロト・カメラ・オブスクーラ像が生成する。これはハイデガーの言をまた引くならばまさに「世界像」の成立の端緒である。遠近法の原理的成立は、単眼視によって身体を初めて明確に光学装置に巻き込む。これが、ドキュメントのレベルで明確化にするものとしてデッラ・ポルタの『自然魔術』の記述をラテン語テキストについて検討した。

ここで明らかになるのは、遠近法に内在する原理的な「世界像」の発動は、字義どおりの camera obscura (暗い部屋) のうちに立つ像を眺める主体には未だ起こらない。歴史的時間と議論を圧縮するというならば、ファインダーを肉眼に接触させるシステムによって、つまりライカ式のシステムによってはじめて遠近法に理論的に内在する人間の世界像の原点としての位置

が、装置的に確保されたといえる。この確認の下に、次のステップの考察を展開する。

1) 本研究遂行の上で基本となる、「中川一夫ライカコレクション」の内、文献については、6月末に集中的に梱包を開封し、書籍の分類を実施した。その上で、地下収蔵庫に確保されているコレクション整理収納スペースに移動を完了した。年度内に、目録を完成させるべく鋭意努力を重ね多くの時間を割いた。同コレクションには当然ライカ関連の文献が多数含まれているが、中川一夫氏は研究者という立場で収集されてきたわけではないため、本研究にとって必要と思われるライカ関連文献、ライカ研究文献が不足している。これらを洗い出して、予算の許す範囲で関連文献を購入し文献一覧を作成する作業を次年度内に完成させたい。

2) 次にライカという斬新な写真装置が、この装置に第一次的に関わる、撮影者、写真作品さらに観者をどのように変容させたのか、さらに、これらの要素と有機的な表裏を形成する写真環境とも呼ぶべき写真産業、マスメディア、展示空間などがどのように相関的に変容したのかを明らかにすることにある。このような問題設定から導き出される一つの重要なケーススタディー的作業は、本学所蔵の世界的にみても貴重なカルティエ=ブレッソン・コレクションを活用する研究である。ライカという写真装置をブレッソンの作品と関連付けて具体的に考察する。この際、本学が博物館に寄贈を受け収蔵した「中川一夫ライカコレクション」の活用が、本研究の枢要なエレメントとなる。両コレクションの連携によって、すなわち、実際に、カルティエ=ブレッソンの写真作品を年代別に調査し、その年代に製造されたライカボディ及びレンズをなぞらえて行く事で、カルティエ=ブレッソンの一連の写真行為の具体相を見極めることで、上記した課題の解決に一つの筋道をつけることが可能となる。これが次年度の大きな課題となるわけだが、そのための準備作業として、本年度はライカボディ本体からレンズ、各種アクセサリに至るまで中川一夫全ライカコレクションの精査と分類を遂行する事を行った。この作業を引き受けて、ライカのメカニズムの進展（進化）が、撮影者—とりわけ主たる参照項としてはカルティエ=ブレッソン—における、ライカという装置と撮影者の関係、representationとしての写真行為の変動を精査し、ライカのもたらしたトータルな表現性の推移とその独得な描写性の謎を明らかにして行きたい。